

# 白金薹

2月号



平成28年2月発行

第60号

白金葭定例句会案内

三月十八日(金) 12:00 ~ 15:00 第三兼題…お水取り、鳥曇

四月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題…梨の花、春眠

五月二〇日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題…初夏、麦飯

三月十八日分兼題(お水取り、鳥曇) 参考句

人はひとのぬくみの中にお水取り 川崎奈美

闇に舞う火の粉の散華お水取り 西川寿賀子

お水取り待つ群衆に夜気迫る 阿形公枝

水とりや氷の僧の沓の音 松尾芭蕉

煤あびて我も籠人お水取り 長谷川權

沓の音水の音しぬ二月堂 大魯

水取や磴につきたる火屑みち 皆吉爽雨

唄ひ出しさうな花束鳥ぐもり 〃

煙所の海へ向く椅子鳥曇 前田典子

観音の山懷や鳥曇 矢吹えり子

鳥曇り地球は一枚の厚紙 松家京子

アイロンは汽船のかたち鳥曇 香坂恵依

少年の見遣るは少女鳥曇に 角谷昌子

この道の先に原子炉鳥曇り 中村草田男

池田澄子

月例句会報(16/2/19 8名欠3)(バレンタインデー、露の臺)

飯田孝三

閉校の庭のはつらつ露の臺

毛繕ふ猫の肉球日脚伸ぶ

露の臺手賀沼は波さざら

バレンタインデー東京や春一番

バレンタインデーデパ地下は女子の熱い<sup>い</sup>き<sup>れ</sup>

増田陽一

春大根の抱擁と断絶

白鳥は球根に似てユーラシア

手賀沼に雉まだ見えず露の臺

バレンタインデー町ちゅうの猫落ちつかず

草を焼く火のみ明るき春の暮

光成高志

春の鳶ひとつ滑空伊良湖岬

娘にもらふバレンタインの義理ちよこつこ

立春や出版稿を電送す

餅焼くや膨れはたまた裏返る

落の臺の焼け焦げ口に放り込む

光  
みち

マユキアの爪で差し出すバレンタインチョコ

手の窪に愛づるひとつや落の臺

節分会待つ子かけっこ鬼ごっこ

ハシガーに蛸干されあて孕猫

雀より小振りの毬の落の臺

吉羽多美子

油揚げ焼いて馳走や午祭

山笑ふ口に余りし塩むすび

午祭赤き幟に空の青

沼の風背に探しをり落の臺

バレンタイン我が青春に悔いのあり

倉田紀子

雪椿ほの字の円し八一の書

濡煎餅の袋を端に春炬燵

立春や花弁くずる砂糖菓子

したたりてのくぼぬらすふきのたう

杖帽子ほふりて庭に青き踏み

松村幸一

空も又萌黄ならずや落のたう

落のたう一と夜の雪を冠り合ひ

忍ぶ恋なつかしバレンタインの日

バレンタインデー嘘の恋ほんものへ

戦争詠の茂吉いたまし落のたう

武者昭七

冬の旅机上プランのままに過ぎ

こころざし衰へし日や置炬燵

初便り二月礼者と詫びのあり

バレンタインの日甘き香りも遠ざかり

春寒や余光の街を歩きけり

浅野正美

バレンタインデー自分に褒美チョコ選び

落の臺思わぬところに二つ三つ

刻む手に春の香移る落の臺

内孫によく似た雛選びけり

子がもらうチョコ気になるバレンタインデー

雑談も一気にどんどこ祓われる

南無妙と木魚の度に蝌蚪生まる

いぬふぐり売り物件で咲いてゐる

眠そうにまぶたのやうな落の臺

眉剃つてバレンタインの女かな

テーブルにコップ一つの落のたう

バレンタイン百面相を子に見せる

蹴飛ばして踏んづけてふきのたう

落のたう五つ貰つて二つあげ

会話弾むバレンタインの親子かな

青木啓泰

田宮敦子

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

4 毛繕ふ猫の肉球日脚伸ぶ 孝三

4 バレンタインデー町ぢゆうの猫落ちつかず 陽一

3 杖帽子ほふりて庭に青き踏む 紀子

3 会話弾むバレンタインの親子かな 敦子

3 節分会待つ子かけっこ鬼ごっこ みち

2 なむあみと木魚鳴る度蝌蚪生まる 啓泰

2 南無妙と木魚の度に蝌蚪生まる 啓泰

2 爪染めて差し出すバレンタインチョコ みち

2 マニキュアの爪で差し出すバレンタインチョコ 啓泰

2 眉剃つてバレンタインの女かな みち

2 手の窪に愛づるひとつや落の臺 正美

2 落の臺思わぬところに二つ三つ 正美

2 又二つ思はぬところ落の臺 幸一

2 落のたう一と夜の雪を冠り合ひ 紀子

2 立春や花弁くずる砂糖菓子 啓泰

2 いぬふぐり売り物件で咲いてゐる 敦子

2 テーブルに一輪だけの落のたう 多美子

2 テーブルのコップに一つ落のたう 紀子

2 したたりてのくぼぬらすふきのたう 多美子

2 バレンタインデー東京や春一番 孝三

1 春の鳶ひとつ滑空伊良湖岬 高志

1 雀より小振りの毬の蔭の臺 みち

1 バレンタインデー地下は女子の熱い<sup>い</sup>臺 孝三

1 蔭のたう五つ貰つて二つあげ 敦子

1 蹴飛ばして踏んづけてふきのたう 敦子

1 蹴飛ばして踏んづけをりしふきのたう 敦子

1 ハンガーに蛸干されゐて孕猫 みち

1 眠そうにまぶたのやうな蔭の臺 啓泰

1 午祭赤き幟に空の青 多美子

1 白鳥は球根に似てユーラシア 陽一

1 こころざし衰へし日や置炬燵 昭七

1 こころざし衰へし日の炬燵かな 多美子

1 山笑ふ口に余りし塩むすび 紀子

1 湿<sup>し</sup>煎餅の袋を端に春炬燵 紀子

1 濡煎餅の袋を端に春炬燵 陽一

1 春大根の抱擁と断絶 陽一

1 冬の旅机上ブランのままに過ぎ 昭七

1 雪椿ほの字の円し八一の書（会津八一記念館） 紀子

1 雪椿ほの字の円し八一の書 高志

1 蔭の臺の焼け焦げ口に放り込む 多美子

1 油揚げ焼いて馳走や午祭 正美

バレンタインデー自分に褒美チョコ選び

空も又萌黄ならずや蔭のたう 幸一

立春や出版稿を電送す 高志

蔭の臺手賀沼は波さざら 孝三

刻む手に春の香移る蔭の臺 正美

忍ぶ恋なつかしバレンタインの日 幸一

初便り二月礼者と詫びのあり 昭七

手賀沼に雉まだ見えず蔭の臺 陽一

雑談も一氣にどんどで祓われる 啓泰

内孫によく似た雛選びけり 正美

バレンタインデー嘘の恋ほんものへ 幸一

バレンタインの日甘き香りも遠ざかり 昭七

バレンタイン百面相を子に見せる 敦子

餅焼くや膨れつはたと寝返りす 高志

餅焼くや膨れはたまた裏返る 陽一

草を焼く火のみ明るき春の暮 陽一

娘にもらふバレンタインの義理ちよこつこ高志 多美子

バレンタイン我が青春に悔いのあり 幸一

戦争詠の茂吉いたまし蔭のたう 昭七

春寒や余光の街を歩きけり 多美子

子がもらうチョコ気になるバレンタインデー正美 正美

一句鑑賞

光成高志

陽一

春大根は秋に播種して旬の冬を越し春になつて二月三月に収穫する。私の畑でも一本種用に残してある。

しかし、掲句はそういう季節感というより、春大根の抱擁を詠ったものだ。昔、浅草の聖天さまに風呂吹大根をいただけるというので、列に並んだ覚えがある。

その聖天さまに大根が俵積みされて供えてあつた。

またいたるところに二股大根を組み合わせた彫刻とか提灯の絵などが見られた。良縁良福を求めて祈願すれば必ず成就する、夫婦仲が良くなると言われ、ご利益を求める男女がお参りする寺である。掲句で一所懸命記憶を手繰り寄せたところ、確かに、春大根がまさに抱擁しているのだ。断絶は如何に。おそらく抱擁の後には断絶があるからか。それだと離脱でいい。断絶はもつと強い言葉だ。切れて絶えることだから。子が沢山生れて一家が繁栄しても、いつかは断絶するということの世の無常を詠ったのではないだろうか。

### 路の臺思わぬところに二二三つ

正美

路は菊科の多年草で早春、いや年が明けたらすぐでも温かい日溜りでは萌黄色の花茎を出す。外側は鱗のような葉に包まれている。それで搭の意味の臺をあてるらしい。思わぬところに見つけた二二三つの路の臺が目に見える。松茸を見つけた嬉しさに通ずる。いや早春の心持の嬉しさの方が強いでしょうね。

### いぬふぐり売り物件で咲いてゐる

啓泰

啓泰さんはいぬふぐりが好きですね。先に「いぬふぐり世の中捨てたものではない」が震災句にありました。掲句は売り物件の宅地にいぬふぐりが咲いている現代風景である。跡継ぎがなく老人の家は家もろとも不動産屋に頼んで売り払うほかなく、田舎でよく見かけるところだ。過疎部落では売り物件はいい方で、捨てられてある家や宅地もある。果ては朽ちて土地だけになつて草茫々の土地の一隅にいぬふぐりが咲いている。聖天さまもいかなともしがたいのである。

### 節分会待つ子かけっこ鬼ごっこ

みち

二月三日の節分の夕方、布佐の神社で豆撒きが行われるので餅を拾いに行く。夕方は子供の部、夜は大人の部と二回行われる。私らのような老人は子供の部に加わる。年男女女を入れて神事があるのでその間神前の庭で子供たちはかけっこしたり鬼ごっこをしたりわいわい騒いだりして待つ。真に賑やか。豆撒き最中は喊声となる。終ると喊声は止み静かな鎮守の森らしくなる。翌日は立春寒明けである。

### 蹴飛ばして踏んづけてふきのたう

敦子

幸一さんの開口一番「危ないところで踏みとどまつた句」とか。私は普通の人のあり様を見せているのを作者が目にしたその心持を詠つてあるので、字足らず

であるが頂いた。風雅とか俳人とか言っておよそ大事に蒔の臺<sup>たい</sup>ごときをもて遊んでいるが、俺達には関係ないよと「蹴飛ばして踏んづけて」ゐるのである。意識しなくてもありうる所作である。それが実人生というものだ。

### バレンタインデイ東京や春一番

孝三

今年のバレンタインデーには低気圧が日本列島を西に移動したので、温かい強風が吹いて気象庁は春一番が吹いたと報じた。東京はそういうバレンタインデーになったと素直な句。孝三さんはこういう句も作られるのだ。「東京や」のやがよく利いているので二重季語感はない。「降り頻る東京八景桜桃忌」(みち)のバレンタインデー版と云います。

### 一句鑑賞

武者昭七

### 春の鳶ひとつ滑空伊良湖岬

高志

春の海を眼下に悠々と空を舞う一羽のとんび。「滑空」が春の空の広さと碧さ、とんびの悠然とした舞いようを見事にとらえた。

### 立春や花弁くずる砂糖菓子

紀子

立春の寒気の緩みと砂糖菓子の花弁の崩れのイメージの重ね合わせにやわらかな女人の肌を想わせるなまめかしさ(エロチシズム)が生れた。単なる写生句を

越えて官能的で象徴的な意味合いの句となった。にじみ出るのは立ったばかりの春の脆さ危さである。

### バレンタインデー町ぢゆうの猫落ちつかず

陽一

バレンタインデーというのがこんなに騒がれるようになったのはいつのころからだろう。僕の持っている古びた歳時記(山本健吉編昭和三十一年刊)にはもちろん載っていない。広辞苑第六版には「一九五八年ころから流行った」とある。いまは義理チョコなどというのも出廻って老若男女日本国中を巻き込んだの狂乱状態だ。陽一さんの句はそんな世相を横目で眺めてからかっているのだ。猫まで落ち着かぬとはなんとも愉快ではないか。人間さまもペットさまも一視同仁、差別なき時代の到来である。

### バレンタインデー地下は女子の熱

孝三

前日からデパートの地下はチョコを買い求める女性群で超満員。ひしめきあう女性の熱気であふればなし。(行ったことないからわからないけれどおそらくそんなだろうと推測するだけだけれど)この句にもそんな情景を感嘆の目で見ただけになってしまった男たちの羨望と揶揄がある。それにしても「女子」はなんと読むのがいいだろう。「じょし」か「おなご」か。後者だったら「べっし」とか「さべつ」とか言われかねないのが「げんだいにつぽん」であろう。

ハンガーに蛸干されゐて孕み猫

みち

正月に伊豆を回った。軒先にサンマの丸干しが簾のように吊るされているのが目についた。縁側には猫が寝そべっていた。そんな平和な漁村の風景が思い出されて楽しい。蛸とハンガーのとつぴな取り合わせが愉快。

### 一句鑑賞

松村幸一

なむあみと木魚鳴る度蝌蚪生る

啓泰

木魚が鳴るたび蝌蚪が生まれるなんて、笑い出してしまいます。でもあの木魚のリズミカルな波動は、障子の外の古池の蝌蚪の紐をたしかに揺さぶりそうです。木魚に感応している蝌蚪を想像するのも愉快ですがその上ニコリともせず木魚を叩きつづけるお坊さんの顔も大写しになって、滑稽さを増幅させる。こういう発想は真面目な吟行俳句からは中々得難く、その背景には現代川柳に深くかかわってこられた経験の豊富な蓄積が生きていましょう。ちなみに「なむあみ」よりは「南無妙」では如何と提案されたのは陽一さん。「鳴る度」を「のたびに」では如何と提案したのは僕。ともあれ木魚と蝌蚪という時間と空間を一つに結んで、折からの人事と自然の春期発動の機微をとらえ得た秀抜果敢な一句ではないでしょうか。

バレンタインデー町ぢゅうの猫落ちつかず

陽一

これ又笑い出さずにはいられぬ一句ですが、どこかに諷刺のサビが利いていて、軽佻ではない。それは「町かどの」ではなく「町なかの」でもなく、「町ぢゅう」の猫を総動員させた一点にかかりましょう。晴れと褻とが、真面目と遊びとが、実と虚とがチョコレートを媒介にして人間世界に往き交うバレンタインの日。それなら私だつて折からの恋の季節であれば尚更のこゝと黙って見過ごせないよと、一句の中で「町ぢゅう」の猫族がぞめき立っています。そしてこの日ばかりは猫という猫が人間の顔を扮装をして仮に人間社会に紛れこんだとしても不思議はないゾ、と説得させる力ある一句でもあります。そう思わせるのは萩原朔太郎の、これは逆に人間が猫族に豹変する「猫町」のイメージの誘いかけによるのかもしれませんが。もう一句、同じ作者の「白鳥は球根に似てユーラシア」には驚き入りました。ユーラシアなんて、ぼくの貧弱な俳句言語圏からは探し出しようもない奇想天外なフレーズ。でもこの句の発生母胎地がもしユーラシアならぬ手賀沼あたりの小景からだとしたら、尚更の想像力の卓拔さに拍手を送らずにいられません。

こころざし衰えし日や置炬燵

昭七

「こころざし」といつても生き死にを託す態の悲壮



な大志ではなく、もっと卑近で日常的な、あれを遂げたいこれも成したいという程度の「強い夢」ととりたいです。そういう日常的な次元の志を次々と追っては成し遂げたり遂げられなかったりの性懲りのない繰り返しが、僕らの人生のような気がします。作者もきつと「こころざし」を少々仰山と百も知りつつ、あえて冒頭に置かれたのでしょうか。だが、決して大きくはないどんなケチな志だって、「こころざし」は「こころざし」。それがどうも危い、挫折しそうだと言分の萎える目もある。この時節炬燵ならぬ置炬燵といううちんまりとした舞台道具が、少々ばかりほろにがい俳諧味を漂わせながらも「こころざし衰えし」人と心を、そつと抱えこんでくれるのではあるまいか。

## ハガキ句 60 報管見

飯田孝三

わが影のいだらぼつち初日の出

ひろし

初日をうけ、今し莊嚴する富士の威に打たれ、だいだらぼつちの如きわが影に驚く。富士山に向かい、その裾野に立つて初日の御来光の一瞬を迎えたのである。だいだらぼつちは、(民俗の伝承については、詳らかにしないが) 一晩で富士山や琵琶湖を造ったという伝説の巨人。(『日本語大辞典』講談社)。天地創造の昔に思いを馳せて、いまさら新年の淑氣に身を染め、いのちを

寿ぐ。思わず、小学の昔が蘇る、教室のありさまが。先生の厳かな口ぶり、悪戯鬼どもの神妙な顔つき、さては、斉唱のひびきまでが。「み民われ生きけるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらくおもへば」(万葉集(六))。(小生、作者と同じく、昭和一桁生れです。)

遠き目の埴輪しづかに年流る

美清流

遙かに埴輪の昔をふり返り、重ね来た人の行き来の日々、世の移り进行を思う。而して、歳月は流れる。喜寿、年頭の所感だろうか。深く、重い句である。「しづかに」が眼目。ふつと、刻々、自適のひびきを感じる。富士山の雪が光れり真正面

圓子

「真正面」が目玉、句のいのちである。中七「く光れり」の切れに、淑氣た走る雪の輝きをまざと見る。贅言無用。新年の句。

草嚙んでゐるが兎の愉快かな

虎童子

えも言われぬ洒脱な詠みっぷりだ。さらさらと口を衝き、「愉快かな」と収めて座る。「嚙んで」が咀嚼の一々を目に見せ、更々、調べを弾ませる。愉快は、心から楽しみよろこぶこと。小生など、つい、草を嚙む「兎」に自分を重ねてしまう。今年は卯年。それに因んだ打坐の句だが、それだけではないだろう。純白の兎にまつわる、東西の説話、伝承を思えば、句の世界が膨らむ。作者は、ほほえんで知らん顔、読み

手己がじしに夢を託す。

太鼓橋二つ渡りて初詣

敏子

太鼓橋「二つ」がめでたい。また、調べがいい。Ta

iKoBaSiFuTaTuWaTaRiTeHaTuMoDe。a音、i音

の繰り返し、加えて、ハ行音「ふタツゝハツゝ」の踏

韻が明るく、軽やかで快。淑氣満ちる正月の句である。

今年もきつとよいことがある。初詣では何を祈ったの

だろう。「俳句はめでたさの文学」と言ったのは、確か

高志

田作の粘着力を愉めり  
「粘着力」が面目。含蓄あり面白い。田作、別名こ

まめを嚙んでいるのだ。“ふむ、なかなかの歯応えだ、

味わいがある”「愉めり」の余裕がこころ憎い。“ま

だまだ、若い者には負けやしない。いやいや、まだ若

いぞ”然り、俳句ばかりか、なべてこれからが本番で

ある。快哉。

右、「ハガキ句（60報）」所掲から、とりわけ共感

の句について、ハガキ掲載の順に小見を付しました。

（俳句通信）

お忙しくお過ごしのごようす、たいへんですね。斉

藤嘉久先生には、以前、貴兄を通じ袖判句集『ドン・

キホーテの夢』を頂戴しました。読後感想の小文をお

送りしたところ、お礼の葉書をいただきました。遅れ

ばせ、ご冥福をお祈りいたします。

菅野孝夫さんの『句と評論』、喜んでいただけ何

よりです。掲載の諸句はともかく、評論は逸品です。

『愚痴の相』の抽出は、気にかけられることはありま

せん。暇を見いみい、ご夫妻でお読みください。氏の

俳句はよく言えば軽妙、悪くは、軽佻。ときに多弁。

尤も、収録は初期の句ばかりのようですが、ともあれ、

処女句集というのには好感します。〈駄句近作〉

二月の空が壊れるスカイツリー

河野裕子逝きて半年春の月

（平 23・02・05）

ハガキ句 60報（11・1・22）

わが影のだいだらぼつち初日の出

大年の海双子座流星群

蒼穹を舞ひたる羽の淑気かな

光陰のゆるやかに過ぐ親子草

初鏡時よ止まれと願ひけり

脱兎にあらずわが喜寿の明けの春

尾白鷺翔つ草原の初日の出

遠き目の埴輪しづかに年流る

富士山の雪が光れり真正面

スカイツリーの丈はあらかた去年今年

ひろし

三穂

白木

たか子

妙子

華空子

三郎

美清流

圓子

孝三

ひしくいを土手から見ている初日の出

草嚙んでゐるが兎の愉悅かな

太鼓橋二つ渡りて初詣

田作の粘着力を愉しめり

啓泰  
虎童子

敏子  
高志

お便り広場（到着順、敬称略）

あけましてお目出度うございます。今年もまたよろしくお願ひ申し上げます。良い年にしたいですね。十四日戸田構造のOB八人と会食みんな元氣でした。月一回他社の構造OBの会一人増え五人となりました。なにもかも教へられることばかりです。皆様の益々の御活躍を祈ります。呉々も御身体を大切にして下さい。

（1・24 小山陽也）

一月二十六日白金葎一月号拝受致しました。何回も繰返し拝読しました。何かお偉い方ばかりの会で私ごととき凡人の入る余地もないのかと感じます。年が明けてもう一月も終わりに近くなり。あと一週間もすれば立春となりますが、先日からの寒波の襲来で非常に厳しい寒さが続いています。雪になれない当地方では二十五日朝の雪にはびつくりしました。スリップ事故や小さな坂道が登れず往生しているのが何台もありました（家の上の県道松永府中線）。毎年正月には娘や孫ひ孫

達が墓参りと仏参りに来ます。五人いる孫も皆結婚して自立しました。昨春秋には最後の孫望美がハワイで結婚式をあげました。広島西区へ住んでいます。娘や孫が皆夫婦で来てくれることは嬉しかったです。自分が生きてる間だけだろうがそれでいいと思っています。孫も皆それぞれに実家を出て別々に暮しています。

親のあとを継ぐといった心はないように感じます。まあそれはそれでいいだろう。国の教育から変えないと治らないだろう。大きな話になった？正月に撮った写真を同封します。簡単な説明をつけています。見てください。一人暮しで今年で十三年になります。娘や孫達がまあそれなりに暮しているので妻は早く亡くなつたが私は幸せであつたと思つている。高志敏子さんそれなりに高齢になります。あまり無理せず自分のペースを忘れずにゆつくりと暮してください。以上返礼まで 高志敏子さんへ 健三より（1・26）

寒風に吹かれながらもウオーキング  
雪の中水仙咲いて春をみる

雪の中まこと名に負ふ雪中花

（「家ありてそして水仙畠かな」小林一茶などの句があります。

水仙の句は難しいです。水仙やと言つて、下に七五と何か別なものを書いて知らんふりをするのがいいみたいです。）

寒中お見舞い申し上げます。先日の雪かきの下積みは氷板と化しところよりまだ残っております。日本の七十二候の中、大寒も次候となりました。日本の七十二候を楽しむ―旧暦のある暮らし―によれば「なるほど」と云うことでしょうか。

大寒、次候 水沢腹あつく堅し（水沢腹堅ふくけん）

新暦では 1 / 25 ~ 1 / 29 ごろ沢の水が厚く張りつめるころ候のことば 春隣はるとなり

旬の魚介 わかさぎ（公魚）

旬の野菜 みずな（水菜）京都では水と土だけで育てたので、みずな。

旬の野鳥 じょうびたき 鳴声が火打石の音のようだから「火焚き」黄びたき。尉鶺鴒。

旬の草花 福寿草 因みに、アイヌ語ではクナウノン。

大寒、初候 款冬華さく 新暦 1 / 20 ~ 1 / 24 ごろ

ふきのとうはなさく 蒔の花が咲きはじめる頃

大寒 末候 鶏始めて乳す 鶏が卵を産みはじめる頃

にわとりはじめてにゅうす

かつて鶏の産卵期は春から夏にかけてでした

新暦 1 / 30 ~ 2 / 3

僭越ながら（歳旦吟）私好みを記します。

堂に満つる児等の顔四方拝 孝三

年越して薊の絮は地に沈む 陽一

窓開けて遠初富士に拳手の礼 高志

梅檀の一本倒す初仕事 みち

元日の夕映え町を包みけり 多美子

病室に白湯飲む四温日和かな 紀子

初芝居あの役者もし居たならば 幸一

寒風や海遠さかる新幹線 昭七

獅子の口カチカチカチと頭食む 正美

初日の出昇り切りたる寒さかな 啓泰

一月は小正月以降ボヤくと過ぎ失った日をムダに過ごした悔いばかり残っています。人日はお義理で国立劇場へ日本舞踊鑑賞、八日東京クラブ句会、友人と行くはずの初詣は相手のインフルエンザで行かず、十一日お鏡開きでお汁粉を作り四五の方に供す、十五日小正月で小豆粥、仏壇の位牌と共に祝う（何故か七草粥はしない家です）そうそう二月は隣家のような愛宕神社へお初穂料持参、ローソクを上げて参拝、神社総代さんから菊正宗一本お神酒、タオル一本頂きました。小さなお宮ながら毎年参拝が増えていきますよ。チョット興味を引かれた\*。ペー。パー封入しました。本年もよろしくご指導下さいませ。

光成様（1／27 璃子） ポリスが来て詐欺にかゝらぬよう

注意あり、名前を聞かれ、ヘン、ツクリ、ナベブタ等言つても解らず閉口でした。偏、旁、鍋蓋（卦算冠の俗称）・高志記

\*こばの食感（中村明）とて東京方言&田園的な「林」奥深い「森」のエッセイ。毎年異なる日に行われる主な行事の今後十年間の日にち（因みに今年の土用の丑の日は七月三十日、名月は九月十五日）

一月二十九日のお便り（切手スタンプは1／31）を頂いてからお返事もせぬ中にもう節分も立春も過ぎてしまいました。風邪も引かず元氣と云いますか、どうか毎日大したこともしないで日が過ぎます。昔と違つてゴミ捨ても分別とか大変でダンボールやら新聞古紙など市の定めに従つてするのも一と仕事、自分で墓穴を掘つたためのおつきあいで、品物のやりとり手紙の往復（主として私よりの往のみ）一時間くらい平気な人達からの何度聞いたか解らない長電話のお相手、もつとする事が沢山あるのにツンケンもできず、やさしくお話を聞きながら心中イラく、時間の使い方の下手さに我ながらうんざりしております。生きる為の食物も買ひに出かけなければならず、確定申告はしなければならず、きさらぎなんて耳に快い言葉はよそごとの如く、二月は寒く多忙で生きすぎは面倒死にたい安倍さんもお毟びではなんて思います。光成様は句に歌仙

に情熱を燃やされみちさんと二人三脚生き甲斐のある人生を進んでいらつしやることお見事です。

白金葎五周年記念合同句集楽しみでございます。みちさんからごていねいなお便りやら美しい絵はがき切手沢山頂きました。お心づかいありがたく恐縮しております。インフルエンザ流行とかお氣をつけ下さいませ。二月八日 光成高志さま 長屋璃子

ごていねいなお便りありがとうございます。地震があつたり北朝鮮の変なタマが発射されたり嬉しくないことばかりですね。頂いた美しい絵ハガキの「西王母」は何十年も前にその名と筒咲きのやさしさが気に入り苗木を植えたのが庭にあり、ことさら嬉しく頂戴いたします。切手も沢山にありますが、五十円などは大きい切手を沢山持つておりますが、五十円などは大きくぎる記念切手でハガキに不向きです。お役人は考えなしに芸術性さえあればいいと思つて作つたのかも知れません。「梅の花」で頂いたギンナン、最近やつと頂きました。仙人ぽい味で好きです。インフルエンザにご注意を、まさかジカ熱にお氣をつけてとは申しませんが。みちさま 二月八日 璃子

（以上の手紙が歌舞伎の霸王の切絵に挟まれてありました。）  
雑用多く遅くなつて申し訳ありません。会費＋α同封致します。古代は別便です。五月から少し駄句をつ

くります。二月六日は初午でした。床の間の掛軸に

「紅梅の紅の通へる幹ならん 虚子」

この字が読めませんでした。宮司さんが来宅してすぐ読みました。流石ですね。なんとか元気でいます。益々のご活躍を祈ります。だんだん暖かくなりました。香取神社は19・20日が梅祭です。くれぐれも御身体を御大切にして下さい。

(2・16 小山陽也)

迂闊にも検査日が第三金曜に当たるとは気が付きませんでした。甚だ残念ですが欠席します。別添の出向をよろしくお願い申し上げます。ご盛会を祈り上げます。

(平成28・2・16 飯田孝三)

春らしい日があつた反動で心浮かぬ日が続いております。寒さの中にも芽吹きが始まり、今が剪り時のものがあつても、中々手につかず、そんなことも生きている人間のストレスの一つかも知れません。一度やめた湯たんぽを又入れて寝ていますが、三階に独り寝に行く寒さかな(漱石) ロンドンの下宿の三階の寒さが解るように思います。今迄つけていた暖房器具全部、電源やガス栓を消して俄に冷えた部屋、寒いものです。バレンタイン狂想曲終ればすぐ雛まつり、戦災で焼けて何もかも無くなったのに長い七十年の間に色々お人形も集まりおひな様と云えるものもあれば出して上げない訳にも行かず出し入れ一仕事なのに続けています

ので、ソロクと思っております。春寒に加え、花粉が飛びはじめた由、お身おいとい下さいませ。

二月十六日 長屋璃子

光成高志様 光 みち様 白金葎の表紙楽しみです。

受贈誌(H 28年2月号)

寒四郎千振に口歪ませて (彩127)

平野ひろし

北ならい行方不明者放送中(〃)

〃

羅漢山観音山も冴返る (〃)

〃

一と葉なき枝に噴き出て花蘇枋(〃)

ひよつこの顔して残る木瓜一つ(〃)

平山三郎

冬薔薇の赤き一輪捨屋敷 (〃)

〃

ひよんの笛吹けば汽笛の音発す(〃)

河端不三子

縄文の火色遺跡の烏瓜(彩125 古平隆評)

平野ひろし

癌癒えてしみじみ啜る心天(飛行雲77号)

駿河岳水

全山の冬紅葉して神戸<sup>かのと</sup>岩(あすか二月号 山尾かつひろ)

武蔵野は冬芽抱く木木度めり<sup>かびる</sup>吟行<sup>いんぎょう</sup> (H28 1・26) 璃子

峡を抜け橋をくぐりて春の水(東京クラブ2月 理佳江)

海に出て暫し和まぬ春の川(〃)

文男

道野辺のおほ犬ふぐり空の色(〃)

晴夫

なりはひは仕立屋と云ひ針祭る(〃)

璃子

真青なる海と空あり梅真白 (〃)

万世遊

こじだま

(彩127号ひろし抽)

二の酉や枅に金俵俵積み

(山尾かつひろ吟行ノート1・26)

探梅やバスの終点まで来たる

蠟梅が真つ黄に咲いて曇空

初キネマ女先生子と泣ける

楠はもっこり雪かぶるかな

高志

みち

高志

孝三

陽也

## 俳窓評論纂

\*孝三さんに赤崎ゆういち氏の句の載った「海程」のコピーを頂いた。以前に比島沖の離島での句を紹介したことがある誼である。氏の平成26年四十九回海程新人賞になった20句、それに今年一月号の二十句などのコピーであった。私の目を引いたのは、下段の叙述文の「ノーベル賞と枯尾花」である。金子兜太先生が今年のノーベル文学賞に選ばれなかったことが残念、

宇多喜代子さんの海程の句は「余りにも言葉が豊富厚すぎ、平明さ(軽み)に欠ける」といわれたことが書かれ、最後に吟行地の風布みかん園と尾花寺の風景に触れておられる。その最後の文章が多少写生文になっていてよかった。最初のノーベル賞云々は的外れ、宇田喜代子さんの指摘は尤もと思われた。芭蕉の莊子傾

倒の精神に触れたら、とてもこんな文章は書けないと思った。率直な感想です。

台風一過鷺の輪空に戻りけり をいただきます。

\*木戸敦子さんから「喜怒哀楽」読み人応援マガジン(詩歌俳柳壇ニュース)2・3 Vol 84が送られてきた。この冊子は本誌と同じ16頁だが、A4の4段組なので分量は四倍分に相当する。中味を紹介する前に本誌もこういう冊子に更衣したいので、彼女からいいアドバイスがえられるものと勝手に思っている。文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(柳ミューズ・コーポレーション)が隔月発行している情報誌とある。スタッフは女性ばかり写真付きで紹介されてあるので安心して頼める。毎月写真が変わるらしい。少し文芸を楽しみ過ぎないかと思うが、これで現代的かもしれない。我が誌は文芸を好み信じ楽しむの好信楽と順序があるのだが、これも好き好きでしょう。菜根譚を表紙に句会の取材紹介俳句の投稿作品百以上、短歌三十三柳三十写俳四十が主な紙面です。紀子さんの故郷の新潟の文化の記憶館という落谷虹児や土田麦僊北一輝山本悌二郎の紹介記事などがある。とにかくよく構成された気楽でまた真面目で細かいところに気の置いた面白い冊子なので付き合ってみようと思います。

55「貝おほひ」捧げし社時雨けり(東京の田野倉さん)





ようにわかりましてどんどん読み進められます。これも文芸の力でしよう。我らの青春は手紙のやりとりを文通と言って心の交換をしていました。その思いを今に見るようで楽しいです。どうかどんどん書いて送って下さいませ。自分の書いた文章が帰ってきて読める楽しみもあると思います。五周年記念号の出版稿は今月で出版社に渡りました。後は初校校正がありますが、木戸敦子さんの見せ場になります。白金葭は相変わらず淡々と進みます。